

ジオパークの魅力を発信する「ジオガイド」紹介



手づくりカヌークラブ代表・認定ジオガイド
もりあき ひろゆき

森脇 博之さん



教室を利用した工房にある製作途中のカヌー。
これから磨きと塗装の工程に入ります。

すべての工程が手作業、木製カヌーづくりを愉しむ

美保関町旧千酌小学校で目にしたのは廊下の壁際にずらりと並ぶ美しい光沢を放つ木製カヌー。さながら博物館か展示場のようで、教室のいくつかはそのカヌーの製作工房となっています。毎週1回、3時間ほどの作業をコツコツ積み重ね、1年半もの時間をかけてカヌーを仕上げるといいます。この「手づくりカヌークラブ」の代表が森脇さんです。アウトドアライフに憧れ雑誌で紹介されていた手づくりキットを購入し、まったくの独学でカヌーを造り上げたのをきっかけに仲間3人でクラブを立ち上げたのが2008年。以来、森脇さんが指導役となって、のべ50艇あまりの木製カヌーがクラブ員たちの手によって造られました。

「それまでカヌーには乗ったこともなかったですが、カヌーがあればという憧れと安価でできるところに惹かれた」といいます。「当初はカヌーを漕ぐことよりも造るほうが面白く、専門の洋書を取り寄せたり外国の動画を見たりして技術をひとつひとつ学びました。木製カヌーは軽しいし、乗る人のサイズに合わせて自在に造れる。あまり人が乗っていないので目立つこともポイント」とし、木造船づくりの技術の継承についても「失敗をたくさん見てきたので、今ではそれが教えとなっています。誰でもじっくり取り組みばきちんと波に乗れるカヌーが造れます」といいます。

ジオガイドになってからは海の見方や楽しみ方が変わってきたという森脇さん。地元ではジオパークの魅力を伝え、ガイドを養成する取り組みも始められました。木製カヌーは工芸品ではなくあくまで移動の道具という森脇さん。カヌーを造ることを通して海原や川面への冒険心をあたためる、大人のロマンを感じました。



曲面が美しい木製カヌー、
これが手づくりとは驚きです。

ぜひ、木製カヌーの作り方を
教えて下さい!!



小泉八雲とセツが見たジオの風景①



写真提供：小泉八雲記念館

八雲とセツは、松江市や出雲市にある貴重な地質遺産に向き『知られぬ日本の面影』でその情景をしたためています。本通信3号にわたり「加賀の潜戸」「出雲（杵築）大社、日御碕」「美保関」での旅の様子をご紹介します。

【加賀の潜戸】（松江市島根町加賀）

「どこよりも加賀浦だ。加賀へは是非行かねばならぬ」は八雲の言葉。八雲とセツは、1891（明治24）年9月上旬に人力車を仕立て加賀浦へ旅立ちました。険しい山道、峠道の連続で、時折、徒歩をまじえる難路でした。草靴は崩れた階段の石に滑り、それでもようやく車夫の助けて漁村の御津浦（松江市鹿島町）に着きました。珍しい西洋人を見ようと多くの人が集まり、身動きが取れない状況となりました。

老人二人が漕ぎ手の小舟で御津浦を出発し、貴重な地質遺産である「加賀の潜戸」に着きました。神秘的な洞窟で神話が伝わる新潜戸（神の潜戸）に八雲は感嘆しました。思わず飛び込んで泳ごうとして、神聖な場所だからと周囲に止められ、しぶしぶあきらめたそうです。

旧潜戸（仏の潜戸）の「養の河原」では、亡くなったこどもが親を恋しがって積んどとされる小石の塔が並ぶ不思議な光景に、深い関心を寄せました。

八雲はこの時の様子を「潜戸―子供の亡霊岩屋」（平井呈一訳）で記しています。

【参考文献】
『小泉八雲の足跡探訪 松江出雲隠岐諸島の旅』島根半島四十二浦巡り再発見研究会
『神々の国の首都に住まふ443日』小泉八雲記念館
『しまね観光ナビホームページ』公益社団法人島根県観光連盟

潜戸観光遊覧船に
ついてはこちら →



新潜戸を運航する潜戸観光遊覧船

ボクも遊覧船に
乗りに行こう!



島根半島・宍道湖中海

ジオパーク通信

出雲国風土記の
自然と歴史に出会う大地

2025.8
Vol.11

ジオパーク推進協議会会員の紹介／地質サイト見どころ紹介……………1
ジオパーク推進協議会の活動……………2
島根半島・宍道湖中海ジオパークと人々の営み／ユネスコ世界ジオパーク紹介……3
ジオガイド紹介／小泉八雲とセツが見たジオの風景①……………4

ジオパーク推進協議会会員の紹介

自然環境や野生動植物を将来にわたって
守っていくことが大切です。



©DLE



元島根大学非常勤講師
技術士・樹木医

佐藤 仁志さん



イズモコバイモ Q&A

島根県の自然環境、野生動植物などに精通

佐藤さんは県職員として長年にわたり島根県の自然環境保護に関する仕事をされてきました。飯南町の赤名湿地性植物群落や吉賀町の六日市コウヤマキ自生林など県内6カ所の「自然環境保全地域」の指定や、「みんなで守る郷土の自然（54カ所）」制度の立ち上げや選定に携わるなど、島根県の自然保護行政の推進に取り組んでこられました。一方で、県内の絶滅の恐れのある動植物を網羅した「しまねレッドデータブック」の作成や、国立公園三瓶山にビジターセンターと自然科学博物館機能を有する三瓶自然館の設立、三瓶埋没林の発掘などに尽力されてきました。さらに退職後は民間組織「公益財団法人日本野鳥の会」の理事長兼副会長としても活躍されました。これらの活動の中には島根県固有種である「イズモコバイモ」の保護活動や、日本では宍道湖で初めて確認されたシンジコハゼの発見や命名に寄与するなど数多くの功績を残され、その博識と経験は手がけられた著作物「宍道湖の自然」（山陰中央新報社）などで知ることができます。

島根半島・宍道湖中海ジオパークでは、「宍道湖の特異な生態系が特筆すべきポイント」とし、「全国でもまれな低塩分の安定した弱汽水域の環境が、そこに適応したヤマトシジミなどの生物の爆発的繁殖のベースとなっている。また、宍道湖西岸の斐伊川河口一帯が西日本最大級の野鳥の渡来地としても貴重なエリア」といいます。佐藤さんの野鳥へのまなざしはときに詩的でもあり、「冬季宍道湖湖心部をめぐらとするマガンの群れが、早朝、いっせいに斐伊川河口上空を通過して餌場をめざす光景は幻想的でとくにすばらしい」と教えてもらいました。その一方で大規模な圃場整備や、滑走路延長工事に伴う河口左岸部の掘削などの影響で野鳥の生息域が減りつつあることなども危惧されています。「ジオパークは地質学的アプローチの他、そこに棲息する生き物や土地に根づく生物や文化など多面的に楽しむことができますので、みなさんもぜひ地域の自然の素晴らしさに触れていただき、それが環境や生態系の保護・保全につながればうれしいです」と話していただきました。

地質サイト見どころ紹介 シリーズ 11 「加賀の潜戸」

松江市島根町加賀の一帯は、約1400万年前の安山岩溶岩（一部玄武岩を含む）とその火山碎屑性堆積物で構成されています。旧潜戸付近は安山岩溶岩と火山角礫岩で、新潜戸付近は火山碎屑性の火山円礫岩や凝灰岩が主体となっています。新潜戸と的島には、断層によって破壊された岩石が風浪による侵食作用を受けてトンネル状となった洞門が形成されています。また旧潜戸にみられる断層は新潜戸へと延長しています。

このような「加賀の潜戸」の洞門には、佐太大神の誕生の伝説が『出雲国風土記』に記載されています。大神誕生の時、母神・支佐加比売命が大切にしていた弓矢が波にさらわれ流されてしまい、「失せた弓矢よでてこい」と祈念されると金の弓矢が流れてきました。母神はそれを取り上げ「暗き窟かな」と申されて、金の弓矢で岩を射通されたとき、光が射し込み明るく洞内が光り輝いたため、「あゝ、かかやけり」と申されたことが加賀の地名のはじまりとされています。



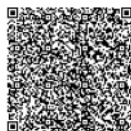
新潜戸内部

「潜戸」は、1927（昭和2）年に指定された国指定史跡名勝天然記念物!



ジオパーク推進協議会の活動

ポケモ小泉八雲とセツが巡った場所に行ってみたい！



くわしくはこちらをご覧ください

1 「小泉八雲とセツの足跡を辿るジオの旅」の参加者募集

小泉八雲とセツは島根半島・宍道湖中海ジオパークの貴重な地質遺産などを巡り、『知られぬ日本の面影』でその情景をしたためています。2人の足跡を辿るツアーを開催しますので、2人が見た“あの日の風景”と一緒に探しに行きましょう。

「日御碕」コースの参加申込は終了しましたが、「美保関」コースと「出雲大社」コースはまだ受け付けていますので、皆様の申し込みをお待ちしています。

「美保関」コース



お申し込み
QRコード▼
申込締切
9月12日(金)



開催日時 9月20日(土) 10:00～15:00
集合場所 松江観光協会美保関町支部(美保関文化交流会館内)奥駐車場
小泉八雲が巡った美保神社、小泉八雲記念公園(八雲が宿泊した「島屋」跡地)などを巡るコース

「出雲大社」コース



お申し込み
QRコード▼
申込締切
10月31日(金)



開催日時 11月9日(日) 10:00～15:00
集合場所 観光センターいずも前
小泉八雲が巡った稲佐の浜、出雲大社などを巡るコース

2 日本ジオパーク再認定審査

ジオパークは、4年に一度再認定審査が行われます。島根半島・宍道湖中海ジオパークは、2017(平成29)年度に日本ジオパークの認定を受け、2021(令和3)年度に初めての再認定審査を受けて4年間の再認定となりました。2025(令和7)年度は認定から2回目の再認定審査が行われ、これまでの活動内容や前回の再認定審査で指摘された課題への対応状況が審査されます。地域の皆様と取り組んできた活動の成果をまとめ、満を持して審査に臨んでいきます。

11月の現地調査員が、日本ジオパーク委員会の久保委員(早稲田大学教授)と霧島ジオパーク推進連絡協議会の石川専門員に決まりました。どうぞよろしくお願いいたします。

【スケジュール(予定)】

9月	プロGRESSレポート (活動報告書)提出
11月22(土) ～24日(月・祝)	現地調査
1月	再認定審査結果公表



前回の再認定審査の様子

3 島根半島・宍道湖中海ジオパーク推進行動計画(2026-2029)の策定

現在の推進行動計画が2025(令和7)年度で満了となるため、これまでの活動の進捗状況をふまえ、2026(令和8)から4年間を計画期間とする次期推進行動計画を策定していきます。

計画策定のスケジュールとして、ジオパークに関わる皆様から今後の活動に対するご意見を募集し、これらのご意見をふまえるとともに、今年度の日本ジオパーク再認定審査で指摘された課題への対応策を盛り込んだ計画案を作成し、2026(令和8)年3月に予定しているジオパーク推進協議会令和7年度定例総会での決定をめざしています。

「地球の貴重な遺産をまもり、次世代に引き継ぐ地域」、「この地域に暮らす誰もが誇りと愛着を持ち、持続可能な地域づくりのために挑戦する人材を育てる地域」、「多くの来訪客に、ジオ・エコ・ヒトを伝えることで、地域振興や観光振興につなげる地域」の実現をめざし、地域の皆様と一体となってさらに活動が推進できる計画となるように取り組んでまいります。



島根半島・宍道湖中海ジオパークのジオストーリー ～大地とそれに関連する生物・生態や人々の営みの物語～ たたら製鉄による出雲平野の形成と斐伊川の天井川化

出雲平野の成り立ちは、たたら製鉄が関係してるんですね。



たたら製鉄とは、砂鉄(鉱物名は磁鉄鉱)と木炭を燃焼させて日本刀の素材となる玉鋼などをつくりだす日本古来の製鉄法です。

中国山地では古くからたたら製鉄を行っており、この地域は原料となる良質な砂鉄を含む花こう岩が広く分布し、また、燃料となる木炭を生産した森林も広大であったため、鉄の一大産地で、最盛期の江戸後期から明治初頭には国内の鉄生産量の9割近くを占めました。

たたら製鉄の原料となる砂鉄は、花こう岩の山を切り崩して砂鉄混じりの土砂を水路へ流し込み、砂鉄を精選する砂鉄選鉱場で砂鉄と土砂の比重の違いを利用して砂鉄を集める鉄穴流しと呼ばれる手法で採取されました。

砂鉄の含有率があまり高くないため、約2億㎡におよぶ大量の不純物としての土砂が排出されました。最終的には土砂の多くは、斐伊川を通じて下流に運ばれ、斐伊川中流の氾濫原あるいは宍道湖岸の出雲平野に堆積しました。近世に堤防や護岸によって河道が固定化されるようになると、河道内にも大量の土砂が埋積し、周辺の氾濫原より河道が高くなり斐伊川の天井川化が進んでいきました。



たたら製鉄
(公財)鉄の歴史村地域振興事業団提供



斐伊川



これから日本の
ユネスコ世界ジオ
パークを紹介して
いきます。

ユネスコ世界ジオパークアポイ岳ジオパーク紹介

～地球深部からの贈り物がつなぐ、大地と自然と人々の物語～

アポイ岳ジオパークは、北海道の背骨・日高山脈の南西に位置する「様似町」全域をエリアとした、ユネスコ世界ジオパークです。最大の特徴は、アポイ岳を形づくっているマントルの石「かんらん岩」。かんらん岩は、地殻のさらに下位にある上部マントルの一部がプレート衝突によって地表に現れたもので、それが一つの岩体としてアポイの山並みをつくっています。地下深くにあるマントルは人類未踏の領域。しかし、アポイ岳ジオパークに来れば地球内部の世界を見て歩いて触れることができ、地球規模のダイナミックな変動を感じることができます。しかもその変動が、きわめてユニークで貴重なアポイ岳の高山植物群落を創り出し、日本各地から訪れる多くの登山者を魅了しています。

また、アポイ岳はこの場所に暮らす人々の営みも育んできました。沿岸に点在する奇岩には、先住民族アイヌの口碑伝説が数多く残り、その周辺一帯は400年以上続く日高昆布の好漁場となって今もこの地域の経済を支えています。ここは、大地が、生態系や人々の暮らしと密接に関連していることを実感することができるジオパークです。

昨年の6月25日には、アポイ岳を含めた日高山脈とその周辺のエリアの雄大な自然価値が認められ、国内最大の日高山脈襟裳十勝国立公園が誕生し、国立公園化を契機に相乗効果でジオパーク活動がさらに活発なものになることを期待しています。



花望む様似



アポイへの道



親子岩の夕日